

# ビデオ脳波が診断に有用であった Migrating Partial Seizures in Infancy の女児例

米倉 順孝      中村 紀子      小川 厚  
田中 美紀      鶴沢 礼実      井上 貴仁  
安元 佐和      大府 正治      満留 昭久

福岡大学医学部小児科学教室

**要旨：**生後50日に発症した難治性部分てんかんの女児を経験した。発作の型は一側上肢上方伸展，反対側上肢屈曲，一側膝関節屈曲，足関節挙上する姿勢が左右問わず数秒から数分間持続するものであり，生後2ヶ月の時点で1日200回以上の発作がみられた。ビデオ脳波同時記録で発作時脳波がみられ，発作間欠期脳波で異なった焦点の発作波を確認し Migrating partial seizures in infancy と診断した。Zonisamide と臭化カリウム投与でやや発作の頻度は減少したが，各種抗けいれん剤による治療に抵抗性で発達の停止を認めている。

**索引用語：**持続性多焦点性けいれん，てんかん性脳症，治療抵抗性，発達停止，てんかん症候群，乳児けいれん